菅谷神社の神幸祭

添田　悟郎

Sinkosai of Sugaya Shrine

Goro Soeda

菅谷神社は神奈川県高座郡寒川町岡田に鎮座し、隣接する小谷・大蔵を合わせた 3 地区の総鎮守である。菅谷神社では毎年 7 月第 1 日曜日に神幸祭が斎行され、大・小 2 基の神輿と囃子の屋台(ﾄﾗｯｸ)が上記 3 地区を渡幸する。神幸祭は神社の御霊を神輿へ遷す遷霊祭(前日の土曜日)から始り、神幸祭当日の神輿宮立ちに際する発輿祭、渡幸中の各行在所で行われる御旅所祭、渡幸を終えた神輿の御霊を再び神社へ遷す還幸祭、以上 4 つの祭儀から構成される。以下に平成 22 年(2010 年)7 月 4 日に行われた神幸祭(前日 3 日の遷霊祭を含む)の様子と、それに関連する神輿や祭囃子などについて紹介する。

Sugaya Shrine located in Okada, Samukawa-machi, Koza-gun, Kanagawa is a total village shrine for three areas: Okada, Koyato and Ozo next to Okada. Sugaya Shrine holds “Sinkosai” on the first Sunday in July every year; the two portable shrines Sugaya Shrine owns, Tenpo mikoshi and Children mikoshi, and the yatai of matsuribayashi parade its areas at Sinkosai. Sinkosai consists of the next 4 rituals: starting from “Senreisai” on the previous Saturday when the spirit of God is moved from the shrine to Tenpo mikoshi, “Hatsuyosai” for portable shrines departing from the shrine to the three areas, “Goryoshosai” held on each Anzaisho where the participants rest during the parade, “Kankosai” for returning the spirit of God form Tenpo mikoshi to the shrine after parading. In this report, I introduce not only Sinkosai held on 4th July 2010 including Senreisai on 3rd, but also the portable shrines and matsuribayashi regarding Sinkosai.

１．菅谷神社

「菅谷(すがや)神社」は岡田・小谷・大蔵の 3 地区の鎮守社で、明治 42 年(1909 年)に岡田・小谷・大蔵の 3 ヶ村の鎮守であった「神明宮(俗称天の宮)」を母体に、岡田村社であった西岡田の「日枝神社(山王社)」と無格社で東岡田の「東守社」、西岡田の「八坂神社(天王社)」、小谷村の「稲荷社」、大蔵村の「諏訪社(第六天社)」の計 6 社が合祀してできた神社である。ちなみに、小谷村と大蔵村は正保 4 年(1647 年)頃に岡田村から分村してできた村である。

図 1-1. 菅谷神社

図 1-2. 社殿

２．例祭

菅谷神社の例祭は 7 月 15 日に行われ、年間祭儀において最重儀とされる神事であり、この祭典だけは菅谷神社の宮司を兼務している寒川神社の宮司が奉仕する。天保 12 年(1841 年)完成の『新編相模国風土記稿』では上記の神明宮の例祭日を 11 月 15 日としているが、明治 42 年に合併した 6 社の中では西岡田に鎮座していた八坂神社が当時の神社としては一番趨勢もあり、合祀後の例祭日は八坂神社の例祭日であった 7 月 15 日としたようである。ただし、明治 9 年(1876 年)頃から平成 8 年(1996 年)までは浜降祭が 7 月 15 日に斎行されていたこともあり、その期間は菅谷神社の例祭を 7 月 14 日に斎行し、直会の後一旦解散、そして夕刻に再度参集して 7 月 15 日未明に天保神輿が発輿して浜降祭が斎行されていたようである。

３．神幸祭

3-1. 概要

菅谷神社の御霊を神輿へ遷して氏子地域を渡幸するのは例祭の日ではなく、7 月第 1 日曜日に行われる「神幸祭(しんこうさい)」である。さらに 7 月第 3 月曜日の海の日には「浜降祭(はまおりさい)」へ参加し、寒川神社神輿を筆頭に茅ヶ崎市南湖の浜で禊を行う。かつては浜降祭の帰りにそのまま村周りをしていたが、昭和 53 年(1978 年)に「昭和神輿」が完成したのを機に神幸祭を別に設けて現在のような村周りを行うようになった。

神社関係の行事を世話する組織は「年番」あるいは「総代」と呼ばれ、西岡田・東岡田・大蔵・小谷・岡田新町の 5 地区から 1 年交代で順番に役員を選出する。年番は胸に総代と染め抜かれた水色の半纏を纏い、頭には麦藁帽子をかぶる。ちなみに平成 22 年(2010 年)は東岡田が年番であった。

3-2. 遷霊祭

神幸祭の前日は朝 8 時から準備が行われ、境内では提灯や掲示板などの準備、町内では注連縄張りなどが進められる。また、神輿殿から社殿へ神輿を移し、振り掛けや鳳凰の取り付けなどを行う。神輿の準備が整うと 15 時から 20 分程の間に御霊を神輿に遷す「遷霊祭(せんれいさい)」が執り行われ、神主をはじめ総代や各団体の代表者が社殿内に参列する。

平成 15 年(2003 年)頃までは神幸祭の前日に、カラオケ大会や簡単な模擬店などを催した時期もあったようだが、現在では翌日の神輿渡幸に備えて準備だけとなっている。

図 3-1. 提灯の取り付け

図 3-2. 神輿の振り掛け

図 3-3. 手水舎で身を清める

図 3-4. 遷霊祭

3-3. 発輿祭

神幸祭当日は総代や神輿愛好会が 6 時 30 分に集合し、境内では神幸祭の準備が進められる。大半の準備は前日で終わっているため、境内の掃き掃除や乾杯の準備などを行う。また、神輿愛好会は神輿担ぎの応援に来る友好団体や協力団体を鳥居付近で出迎え、総代らが受付で御祝儀などの対応をする。7 時 30 分になると「発輿祭(はつよさい)」が執り行われ、修祓・発輿祭祝詞奏上・参列者玉串拝礼などを経て乾杯を行う。

図 3-5. 祝詞奏上

図 3-6. 玉串拝礼

発輿祭が終わるといよいよ神輿がお宮を出発し、8 箇所の行在所(御旅所)を経由しながら菅谷神社の氏子地区を渡幸する。輿道は毎年決まっているが、隔年で回る順番を「岡田→大蔵→小谷」と「小谷→大蔵→岡田」の方向で反転させている。ちなみに平成 22 年(2010 年)は岡田→大蔵→小谷の順番であった。

図 3-7. 一本締め

図 3-8. 社頭発輿

3-4. 御旅所祭と神輿渡幸

各行在所では「御旅所祭(おたびしょさい)」が斎行され、修祓・御旅所祭祝詞奏上・参列者玉串拝礼が執り行われる。現在は行在所で休憩を取りながら氏子地域を渡幸しているが、昔は行在所と呼ばれるものはなく、一升瓶と茶碗が用意してある家に立ち寄り、それを飲み干さなければ出発できなかったという。また、神輿を担ぐ際の掛け声は「ドッコイ」であるが、昭和 50 年(1975 年)頃までは「ワッショイ」という掛け声で、神輿を担いだ状態で村内を走り回ったという。今でこそ神輿の担ぎ手は揃いの半纏を身に纏っているが、当時は決まった衣装はなく、男性は女装や化粧をするなど仮装行列のような格好であったという。

図 3-9. 行在所(寒川駅前)

図 3-10. 御旅所祭(東守神社)

図 3-11. 囃子屋台(湘風園)

図 3-12. 神輿渡幸(福泉寺付近)

3-5. 還幸祭

一日の長い渡幸を終えた神輿が無事に菅谷神社へ戻ると、神輿愛好会の会長により三本締めが行われる。子供神輿と天保神輿が拝殿内に納められると、総代や代表者が参列して還幸祭「(かんこうさい)」が執り行われる。神事の中では天保神輿から御霊を社殿へ遷す還幸の儀が執り行われ、社殿内の明かりを全て消した状態で神主が御霊を遷していく。なお、前日の遷霊祭から神幸祭が始まり、この還幸祭で一連の神幸祭の全てが完了するとの観点にて、「斎主一拝(さいしゅいっぱい)」は遷霊祭の始めと還幸祭の最後の 2 回しか行われない。

図 3-13. 宮入りする子供神輿

図 3-14. 境内を練る天保神輿

図 3-15. 還幸祭

図 3-16. 境内の露店

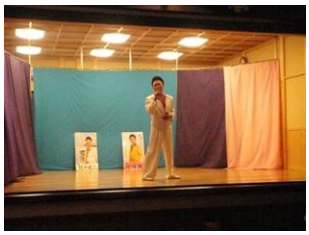

図 3-17. 神楽殿での余興

図 3-18. 余興を楽しむ観客

神楽殿では夕刻から奉納芝居演芸が催され、露天商も多数出店するなど賑やかな境内となり、神輿の宮入り時が神幸祭で一番の盛り上がりを見せる。神幸祭は 21 時頃には全ての行事が終了し、この日はおおまかな片付けのみで解散となり、全体の片付けは翌日の朝から行われる。

４．神輿

4-1. 西岡田八坂神社の神輿

かつて西岡田で祀っていた八坂神社は明治 42 年の神社合祀で神明宮に統合されたが、その八坂神社の神輿には昔から伝わるものと、天保 15 年(1844 年)に寒川神社から払い下げられたものとの 2 つの神輿が存在した。もと寒川神社の神輿は天保 9 年(1838 年)に国府祭の還幸時に馬入(平塚市)の地で相模川へ流された神輿であるとされ、流出していた神輿は数日を経て南郷村(茅ヶ崎市・南湖)の浜に漂着し、その後寒川神社へ返還された。寒川神社では天保 10 年(1839 年)に神輿を新調すると、発見された神輿は解体せずに天保 15 年に岡田村へ譲り、修復墨書にあるように岡田西三町(根下・仲町・大塚)の八坂神社神輿となった。

4-2. 岡田から大曲、そして入野へ

明治 29 年(1896 年)に上記の八坂神社にあった神輿の部材を使って神輿を新造したという言い伝えがある。八坂神社は神輿を新しく造ろうとしたが、その際に 3 体の古い神輿の部材を使って新造した。1 つは古くから八坂神社に伝わってきた神輿、2 つ目が寒川神社から譲り受けた神輿(馬入川で遭難した寒川神社の神輿)、そして 3 つ目は神輿職人が持ってきた神輿であった。これら 3 基の神輿の材料で作られた神輿が菅谷神社に現存するいわゆる「天保神輿」で、残った神輿の部材には不足部材を買い足しながら新たに 2 つの神輿を造り、1 体は大曲の十二神社へ売った。大曲ではさらにこれを南湖中町(茅ヶ崎市)の八雲神社へ売ったという。

明治 23 年(1890 年)生まれの前田喜一氏によると残りの 1 体は「川向う」に売ったとされ、これを売るときに岡田の若い衆が一之宮の相模川の河原まで担いで行き、買い手の若い衆が田村(平塚市)側の土手に並んで待ち受けていたという。近年までこの川向うにある譲渡先が不明であったが、平成 9 年(1997 年)の調査により平塚市入野の八坂神社である可能性が高くなった。

4-3. 菅谷神社の天保神輿と昭和神輿

明治 42 年に西岡田の八坂神社が神明宮へ合祀されて菅谷神社となると、八坂神社の神輿もまた菅谷神社の神輿となった。この神輿は上述のように明治 29 年頃に新造されたと考えられるが、天保 15 年に寒川神社から譲り受けた神輿の部材を使っているという伝承から、「天保神輿」という名称で呼ばれるようになったと思われる。

その後の天保神輿は老朽化が進み、昭和 50 年代における神輿ブームに乗った形で新しい神輿が再建されることとなった。この「昭和神輿」の請負は東京都葛飾区の出村栄作氏で、昭和 53 年(1978 年)6 月に完成すると、それまで担がれていた神輿は翌昭和 54 年(1979 年)12 月 15 日に天保神輿として寒川町の重要文化財に指定された。昭和 55 年(1980 年)には新しく子供神輿も完成し、最終的には昭和 55 年 7 月の神幸祭において、子供神輿が昭和神輿と共に渡幸されたことで一連の記念行事は完遂を見た。

図 4-1. 昭和神輿(S53 新造)

図 4-2. 子供神輿(S55 新造)

昭和53年に新調した神輿は19年の歳月が経つと損傷が目立つようになり、平成 10 年(1998 年)6 月に合祀 90 周年事業として、それまで担がれていなかった天保神輿を修復した。見積もりは小田原の西山神輿製作所と浅草の宮本卯之助商店の 2 箇所へ依頼し、最終的には請負業者を前者の西山神輿製作所に決定した。この際、2 基の神輿を見せて修理の話を持ちかけたところ、天保神輿の方を直したいといわれたという。

図 4-3. 天保神輿(H10 修復)

図 4-4. 遷霊祭前の 2 基の神輿

５． 祭囃子

5-1. 岡田祭ばやしの歴史

菅谷神社の氏子地域の中では岡田地区にだけ祭ばやしがあり、小谷地区にも大正時代に祭ばやしがあったという言伝えもあるが、現在では伝承されていない。岡田祭ばやし保存会の初代会長夫人である顧問三留トク氏によると、岡田地区の祭ばやしは明治初期頃より引き継がれており、同氏が子供の頃に父親達が東守神社で太鼓を叩いて披露した思い出があるというが、昭和に入ると戦争により一時中断していた時期があったという。

昭和48年(1973年)頃になると県下各地で昔からの郷土芸能が見直され、ふるさとの祭り行事が復活するようになると、この岡田地区でも有志の人達による夏の盆踊りの復活と共に、当岡田地区に昔から残る郷土芸能として太鼓を復活しようという話が持ち上がった。その結果、今なら思い出しながら太鼓を叩けるのではないかとの結論に至り、当時の自治会など各役員をはじめ、地域有志賛同者の協力により発足の運びとなった。初代会長であった故三留高治氏は復員後に村の青年達を誘い集めて再び太鼓連をまとめあげると、昭和50年(1975年)5月に同氏が代表となり会員25名で「岡田太鼓保存会(現岡田祭ばやし保存会)」を発足した。

5-2. 囃子の構成と曲目

囃子は「大太鼓」・「締太鼓」・「鉦」・「笛」で構成され、昔は締太鼓2人の5人1組であったが、現在では締太鼓を増やして2人以上で演奏している。また、昔は「ショウテン」や「カマクラ」などの曲も演奏していたというが、現在では「シンバヤシ(新囃子か?)」のみが伝承されている。シンバヤシは笛の吹き始めから締太鼓のブッツケが入り、大太鼓と鉦が加わる。基本フレーズは「ジ(地か?)」とよばれ、ジの途中で3種類の「コロガシ」と呼ばれるキザミのようなフレーズを入れる。ジとコロガシの間には繋ぎの役目をする「ケエチゲエ」と呼ばれるフレーズを挟み、ジと3種類のコロガシをスムーズに組み合わせながら繰り返し演奏を続ける。シンバヤシを終わらせる時には叩き手の「そーれ」という掛け声が入り、曲を終わらせる為だけのフレーズを入れる。

図5-1. 神楽殿での演奏

図5-2. 屋台での演奏

６．むすび

菅谷神社の神幸祭の特徴としては、神輿を台車やトラックに載せて移動させることなく、宮出しから宮入りまで終始担いで渡幸することが上げられる。近年によく見られる傾向だが、大半の神社祭礼では担ぎ手の減少や渡幸時間の縮小、さらには交通状況の変化などに伴い、全ての氏子範囲を担いで渡幸することが困難になってきている。しかし、ここ菅谷神社では浜降祭前の渡幸であることも幸いして、多くの友好団体および協力団体の担ぎ手が参加し、今でも昔ながらの神輿渡幸を継続することができている。

○参考文献

1.『さむ川その昔を語る　第九集』　寒川町郷土研究会　(1985)
2.『寒川町史12 別編 民俗』　寒川町 (1991)
3.『寒川町史9 別編 神社』　寒川町　(1994)
4.『寒川町史研究第11号』　寒川町史編集委員会　(1998)
5.『寒川町史7 通史編 近・現代』　寒川町　(2000)
6.『岡田祭ばやし30年のあゆみ』　(2005)
7.『寒川祭ばやし30年』　寒川町囃子保存連合会　(2005)
8.『菅谷神社誌』　菅谷神社誌編纂委員会　(2008)

作成 ： 2011年1月